文部科学省科学研究費補助金（研究成果公開促進費）研究成果公開（B）

文化財の保存と修復Ⅱ

伝統ってなに？

主催●文化財保存修復学会

後援●文化庁/京都府/京都府教育委員会/京都市教育委員会
京都市/日本文化財科学会/全国博物館学講座協議会
国宝修理装潢師連盟/文化財保存支援機構/京都新聞社
NHK京都放送局

会場●京都テルサホール

開催趣旨

日本の文化には、多様な文化財が延々と息づいてきた。そして、文化財の保存・修復のために、長い年月のなかで培われた、いわゆる「伝統的」な技術が用いられてきた。最近では、新しく開発された材料や技術もとりいれられるようになってきたが、やはり従来からの「伝統」にはかなわない点も多いといわれる。では、ここでいう「伝統」とはなにだろう？

文化財保存修復学会が、「文化財の保存と修復」としてこれまで行ってきた一連のシンポジウムでは、この分野で最近実用化された新しい技術や方法論をとりあげることが多かった。しかし、ここで改めて「伝統」を問い直し、「なぜそれが伝統になりえたのか」と問いかけるとともに、新しい技術は将来「伝統」となりえるのか、また、「伝統」となるためにはどうすればよいのかなど、さまざまな分野から実例を示しながら議論することは、これからの文化財の保存と修復を考えるうえできわめて有意義であると考える。

また、本シンポジウムが、次代をになう若い世代に、文化財の保存・修復の分野の奥の深さを知ってもらうとともに、文化財保存の重要性を再認識する契機を提供する場となることを期待している。

PROGRAM　平成16年10月2日（土）

総合司会●元興寺文化財研究所　村田　忠繁

10:00〜10:30　開催挨拶・基調講演　**文化財と伝統**
会長、実行委員長／独法・国立博物館　三輪　嘉六

講演Ⅰ●座長　東京国立博物館　神庭　信幸

10:30〜11:00　**文化財としての絵画の修理と「伝統」**　文化庁　鬼原　俊枝

11:00〜11:30　**よみがえる仏** — 伝統の技と新技術 —　(財)美術院　藤本　青一

11:30〜12:00　**表具技術で壁画を救う** — 法界寺壁画の事例 —　(株)岡墨光堂　岡　泰央

12:00〜13:15　昼食

講演Ⅱ●座長　京都造形芸術大学　内田　俊秀

13:15〜13:45　**海外に根付いた日本の伝統**
ライデン民族学博物館　フィリップ・メレディス

13:45〜14:15　**成長する芸術** — 日本庭園の伝統と保存 —　京都造形芸術大学　仲　隆裕

14:15〜14:45　**博物館が継承した「伝統」**　京都国立博物館　森田　稔

14:45〜15:00　休憩

15:00〜16:30　**パネルディスカッション**

コーディネーター　実行副委員長／奈良文化財研究所　村上　隆

パネリスト　三輪　嘉六／鬼原　俊枝／藤本　青一／岡　泰央
フィリップ・メレディス／仲　隆裕／森田　稔

16:30〜16:45　**総括・閉会挨拶**　会長、実行委員長／独法・国立博物館　三輪　嘉六

基調講演　文化財と伝統

文化財保存修復学会会長、実行委員長／独立行政法人国立博物館　**三輪　嘉六**

文化財を保存するということは、基本的にはそれぞれの文化財の本質を後世に正しく継承していくことだ。

この継承のなかに多くの「伝統」といわれるあり方が知られるのであって、それは文化財を保存するための方法や文化財を修理する技法・手法、あるいは素材、材料のあり方に至るまで、長い歴史のなかで培われてきた。美術工芸品、建造物、民俗・無形など文化財の分野の違いに関係なく、保存・修復についての独自な伝統のさまざまが存在している。

日本の文化財の保護は、まずこの伝統を保持することに多くの力を注いできた。かつて近代社会への転換に際して、古い生活様式や意識形態が改められ、民族的な規模での新しい生活や意識の様式が成立してくる。明治30（1897）年に制定される「古社寺保存法」などの文化財を保存してゆく制度の成り立ちは、まさに日本人のアイデンティティーとしての文化財を保持するためのあり方をめぐって、近代国家と「伝統」の関係を制度的に整理したものであったとうけとめることが可能である。こうした様相は、近代的な国家と社会の成立をその基底部から支えるひとつの過程としてどの民族にもみられる普遍史的な事情である。この通則のなかにあって文化財を保存してゆく伝統とそれを守る制度がどのようにからみあってきたか、今後の文化財の保護を考えてゆくうえで改めて見直してみたい。

文化財としての絵画の修理と「伝統」

文化庁　鬼原　俊枝

文化財としての絵画の修理にあたっては、その真正性（authenticity）を護ることが要求されます。文化財修理の場において、真正性と伝統とがどのような関係にあるか、ひとつの例をあげて考えてみたいと思います。

まず、文化財における真正性とは、文化財に新たなものをつけ加えたり、あるいはオリジナルの一部を取り去ると失われることすらあります。たとえば、オリジナルに補彩などを行えば真正性は大きく傷つきます。

他方で、文化財が長い間に人から人へと渡し継がれるうちに、時間が文化財のうちに刻み、遺していったものが価値として意識される場合があります。料紙表面の細かい毛羽立ちによる柔らかで厚みを感じさせる風合い、よごれ、酸化などによる色合いの変化、料紙料絹の折れによる細かくうすい陰影といったものです。これらは画家が制作したものではなく、画面の付着物、料紙料絹の損傷などの見え方です。

修理が終わって折れや毛羽立ちがおさまると、かつて確かにそこにあったものが失われてしまったと気づき、失われたものが強く意識され、次に、それまでは常にあり続けていたはずのものを失ってしまったと意識し、その結果、次回に修理するときには、常にあり続けた確かなものを修理によって失いたくないという意識を生み、折れは遺せないが、よごれや毛羽立ちはできるだけ遺そうとする方針が立てられる場合があります。

こうした古びた趣を愛する価値感は、文化財を受け継いできた人々によって育てられてきたものです。それは人々の意識そのものであって、いわば伝統的価値といえるでしょう。 つまり、この絵はこうあるべき（あるいはそうあるべきであった）と意識されるとき、それがそのものの正しい姿として映り、先達から受け継がれたものと意識されるとき、ひとつの伝統的価値が成立します。

文化財の価値は、人々の意識のなかで真正性と伝統とがからまりあって成り立っているといえます。文化財修理に携わる者は、この問題にどう取り組むべきなのでしょうか。

よみがえる仏 ― 伝統の技と新技術 ―

（財）美術院　藤本　青一

私たちが行っている彫刻・工芸品（主に仏像彫刻）の文化財修理において、伝統ってなんだろうと、改めて考える機会を得ました。

私ども美術院が携わる文化財修理の伝統は、直接には明治30（1897）年古社寺保存法の制定から始まる100余年の歴史があります。これは彫刻・工芸品のみならず、現在の日本の文化財修理全般についての基本理念である「現状維持修理」に基づく、近代的な修理法の歴史です。

一方、修理対象となる仏像彫刻は7世紀より造像され始め、1,400年あまりの間に、その種類・材質・技法が変遷してきました。長い年月の間には壊れたり失われたりする文化財が数多くあり、何度も修理の手が施されています。今日まで伝わった文化財には、時代時代の修理法の歴史が刻まれているのです。

現在の文化財修理は、修理対象を真新しい姿に再生するのではなく、今日まで受け継がれてきた状態を尊重しつつ、制作された当初の姿がより想像できる状態にとどめおくものです。それを実行するために、各時代の修理法を研究し、古来からの伝統的技法・材料・道具を用い、それに加えて新しい素材や技術をとりいれています。

今日まで受け継がれてきた文化財を次の世代に適切な状態で受け渡すこと、そして文化財保存修理の伝統を継承・発展することが私たちの使命であると考えます。

京都・三十三間堂、木造千手観音立像　昭和20年代の修理風景

表具技術で壁画を救う ― 法界寺壁画の事例 ―

(株) 岡墨光堂　岡　泰央

表具の構造と修理

古くからわが国では、紙や絹に絵が描かれた多くの場合、裏面よりそれらを支えるために、数枚の裏打紙が接着されてきた。そして、掛軸装や屏風装などのさまざまな形に仕立てられ、鑑賞や保存が繰り返されてきた。残念ながら、たとえば掛軸装では、巻くことによって折れたり、表面が擦れたり、それらの損傷が進行して亀裂が発生するというようなことがある。そのため、損傷が進行することなく、引き続き鑑賞・保存が可能であるように、修理という行為が必要とされる。裏打紙が接着されている絵画の修理では、それらの裏打紙を完全に除去し、亀裂や欠失などの損傷を裏面より繕い、新たな裏打紙を接着することが重要な基本であると考えられている。

裏打紙の除去

裏打紙を除去する方法はいくつかあるが、そのなかのひとつに、絵の描かれた紙や絹の脆弱化が非常に進んでいるような場合に有効な方法として「乾式肌上げ法」がある。これは、本紙の表面を布海苔と紙によって固定してから、裏打紙を除去する方法で、時間は一般的な裏打紙の除去方法よりもかかるけれども、弱い紙や絹の裏打紙の除去方法にはたいへんに有効な技術として、特に近年は注目を浴びている。

阿弥陀堂内陣の壁画は表面の彩色層や絵の描かれている漆喰層に損傷が発生し、修理が必要とされていた

法界寺壁画の修理

阪神淡路大震災によって、京都にある法界寺阿弥陀堂内陣の壁画の損傷は大きなものになり、修理の緊急性が指摘された。建物の壁に描かれたこの重要文化財の絵画の完全な修理を行うためには、いったん、壁画を建造物から剥がし取る必要があると考えられ、紙や絹の修理の技術として利用されている乾式肌上げ法を応用して、壁画の剥ぎ取り作業が行われた。彩色層や漆喰層の強化だけでなく、さまざまなところに裏打紙を剥がしたり、接着したりする表具の基本的な伝統技術からヒントを得た方法が活用されて、壁画の修理作業は進められたのである。

海外に根付いた日本の伝統

ライデン民族学博物館　フィリップ・メレディス

現在、海外の紙修理の世界はかなり日本の技術、道具や材料の影響が強く、特に1960年代から修理関係者の間の交流と教育的な働きが活発となりました。その関係で、日本の歴史の長い表装の伝統からいろいろヒントを得たり、西洋の紙製美術品の修理のために、日本の和紙、道具と技法をとりいれています。寸法が大きい物の修理の際には、特に注目されています。ヨーロッパの修理の伝統では、壁紙、ポスター、絵図などは織物の麻、あるいは亜麻布で裏打ちするのが一般的でした。けれども時間がたつと、麻と紙の伸び縮みの違いによって、糊離れと破損が起こります。そのかわりに、薄くて強い和紙で裏打ちすると、持ちがよくなります。

オランダで行った壁紙修理プロジェクトのうちのひとつを述べます。デン・ハーグにある王立宮殿のハウス・テン・ボス（1645〜51）の“中国の間”には、「稲農業図」手書き輸出用の壁紙が18世紀の中頃に張りつけられました。この壁紙は修理のために、古い麻からとりはずされてから、改めて和紙で裏打ちされました。そして壁に張り直すために、日本の障壁画用の下張り準備もしました。

このような仕事のために、日本の修理伝統が海外にも繁茂しています。

“中国の間”修理後　中国産輸出用の手書き壁紙、18世紀。オランダ、デン・ハーグ、ハウス・テン・ボス王立宮殿

成長する芸術 ― 日本庭園の伝統と保存 ―

京都造形芸術大学　仲　　隆裕

日本庭園は「自然風形式」と呼ばれるように、いつの時代においても自然への深い想いによってつくられてきた。日本庭園の鑑賞は、庭園に身をおいて、審美的であったり、思想的・宗教的であったり、享楽的であったり、というさまざまな「自然への思い」を共有するところにその魅力がある。

自然風景や名所の情景をモチーフとした平安時代の池庭に対し、中世には風景を自分の感性で組み立て直した心象風景を表現する庭園が新たな様式として生まれた。中世末期、茶の湯の文化とともに成立した露地（茶庭）は、茶の湯を介して自然と深くかかわりあう非日常の空間で人間の精神文化を深く追求する場であった。中・近世にかけて成立した武家の居館の庭は、書院における主従対面の儀式の場を飾る座観の庭であり、近世において公家が営んだ庭は、桂離宮に代表されるように王朝時代の風流を受け継ぐもので、池庭に茶室を配して連歌や茶の湯を楽しむ廻遊式庭園であった。山県有朋の無鄰庵を嚆矢とする近代庭園は象徴主義を離れ、名所の風景でもない身近な里山の風景をモチーフとする快活な庭となった。このように、歴史をふりかえると各時代それぞれに特徴ある庭園が営まれたことがわかる。

文化財庭園は、各時代の美意識を代表するものとして歴史的価値をも踏まえて保存継承されてきた。ところが近年の調査によって、必ずしも作庭当初の姿をとどめているといえないことが明らかとなってきた。各時代に生みだされた名園は、次の時代に引き継がれ、多くの場合、新たな時代の要素がつけ加えられ現在に至っているのである。この意味から庭園は「成長する芸術」といえるのであるが、このとき「時代の真正性」をどのように位置づければよいのかが大きな問題となる。一方、石・水・植物は日本庭園を構成する三大要素といわれる。堅牢にみえる石組みも歳月を経て傾くこともある。水の流れは地盤を浸食し、その流路を徐々にかえていく。植物は生長・枯死し、鳥が運んだ種子は人知れず大きくなる。文字どおり庭園は「成長する芸術」である。変化することは庭園の魅力であるが、これをコントロールしなければ庭園はまったく別物にかわってしまう。その調和をはかる行為が「手入れ＝文化財庭園管理技術」である。

本講演では庭園の保存修復事例、植栽管理事例の紹介を通じて、「成長する芸術」である日本庭園の伝統と保存について考えていきたい。

名勝玄宮楽々園における植栽整備　荒廃しつつあった植栽景観を、文化年間に描かれた「玄宮園図」の姿を手掛かりとして整備が進められている。当時とは環境条件が大きく変化しているなかで、どこまで大名庭園の趣が再現できるであろうか

博物館が継承した「伝統」

京都国立博物館　森田　稔

わが国の博物館の歴史は、明治5（1872）年に旧湯島聖堂大成殿で開催された日本初の博覧会を契機として発足した「文部省博物館」（現東京国立博物館）が出発点である。その後、明治28（1895）年に帝国奈良博物館（現奈良国立博物館）、30（1897）年に帝国京都博物館（現京都国立博物館）が相次いで開館した。これらの博物館は展示・公開という事業のみならず、当初から古社寺に伝来した文化財の保存もその主要な任務として、「蔵」の役割をになってきた。

そもそも博物館がになう機能には、展示・収蔵・修理が求められ、それぞれに伝統的手法が活かされている。ここではそのひとつである「蔵」＝収蔵に焦点を絞り考えることにする。「蔵」の機能は第一義的には防火・防犯といえるが、鉄筋コンクリート造あるいは鉄骨造の建物が一般化した現在、もっとも重要な役割は温湿度等の保存環境の安定を確保することにある。その点で著名な正倉院は、校倉造の建物に「唐櫃」という「蔵」に納められ、千年以上も文化財を守り続けている。このような伝統をうけ、昭和40（1965）年代後半以降、博物館の収蔵庫の内装材として、調湿作用や外気の温湿度変化に対する減衰作用に優れた木材を採用し、壁の二重構造とする施設が急増した。また、木製の収蔵棚はスノコ状の棚に桐製の収納箱をおくことにより、温湿度の安定化に大きく寄与しているばかりでなく、地震災害から文化財を守る役割もはたしている。

木製内壁に囲まれた収蔵庫内に木製の棚を設け、桐箱に納められて文化財が整然と収蔵されている

ところが昭和50年代半ばから、収蔵庫の内装材として調湿機能をもった人工木材が開発され普及し、それにともない収蔵庫を「魔法瓶」化する傾向が著しくなってきた。また、収蔵棚についても、新たに額装の絵画類の収納用として絵画ラック、文化財のそれぞれの形態にあわせた多種多様な「棚」が導入され、地震対策として飛びだし防止用扉を設置するなど、さまざまな「改良」がなされてきた。

本来日本では、収蔵＝「しまう」行為は、箱に納めなおしたり、たたむ、包む、ことであったはずで、それぞれのモノの機能や構造に根ざした「しまう」行為を前提とした形であった。これは風土や生活に根ざした行為によって収斂されてきたひとつの「形」であり、常に美しくしまうことを考えたうえでの構造であり製作技術であった、と考えてきた。近年の「改良」された博物館収蔵庫をみるとき、たんに外形にあわせた造作をつくり、「かける」「おく」「入れる」という今までにない収納法が現れてきていることに気づく。博物館が継承する「伝統」とは何か、改めて問い返す機会かもしれない。

講演者紹介

三輪　嘉六（みわ　かろく）
文化財保存修復学会会長。独立行政法人国立博物館九州国立博物館（仮称）設立準備室長
1938年生。日本大学史学科卒業。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁主任文化財調査官、東京国立文化財研究所修復技術部長、文化庁美術工芸課長、同文化財鑑査官、日本大学教授を経て、98年より九州国立博物館（仮称）設立準備室長。
専門は考古学、博物館学、文化財学。
文化審議会文化財分科会の各専門委員、独立行政法人評価委員会委員（文化分科会）をはじめ、各地で文化財の保存・活用についての各種委員。99年から文化財保存修復学会会長に就任。
著書に、『日本馬具大観Ⅰ～Ⅳ巻』（編著、吉川弘文館）、『家形はにわ』（日本の美術　至文堂）、「美術工芸品をまもる修理と保存科学」（『文化財を探る科学の眼 5』国土社）、「Horses in Ancient Times」（『Horses and Humanity in Japan』The Japan Association for International Horse Racing）、「文化遺産危機管理的基本課題」（『1999台湾集々大地震―古蹟文物震災修復技術諮詢服務報告書―』台湾国立文化資産保存研究中心）など。

鬼原　俊枝（きはら　としえ）
文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官
1981年大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻後期課程単位取得退学。94年大阪大学より博士（文学）学位取得。95年より現職。
専門は近世絵画史、特に狩野探幽論。現在は修理に興味をもつ。
1998年国華賞、99年島田賞受賞。
著書に、『幽微の探究　狩野探幽論』（大阪大学出版会、1998）、「旧円満院宸殿障壁画中の探幽画と画風変革開始の時期」（『国華』1284号、2004）。

藤本　青一（ふじもと　せいいち）
（財）美術院所長
1974年大谷大学文学部史学科日本仏教史専攻卒業。同年、財団法人美術院国宝修理所に修技生として入所、85年技師に昇進、2000年所長に就任、今日に至る。

財団法人美術院理事。今年度（2004年度）京都国立博物館文化財保存修理所運営委員。同・修理者協議会会長。
専門は文化財保存修理（彫刻および大型工芸品）。選定保存技術（木造彫刻修理）の団体に属す。

岡　泰央（おか　やすひろ）
（株）岡墨光堂専務取締役
1994年関西学院大学文学部美学科卒業、96年同大学大学院文学研究科美学美術史専攻修士課程修了。大学院修士課程修了後、米国スミソニアン研究機構フリーア美術館学芸部リサーチアシスタントを経て、99年に帰国。2004年4月より現職。2001〜03年京都橘女子大学非常勤講師（文化財）。
専門は装潢技術。最近は人文科学と自然科学の知識を修復現場に積極的に導入することに興味をもつ。
論文に、「フリーア本東北院職人歌合絵巻について」（美学論究第14編、1999年3月20日）、「The use of digital imaging in the mass repair of Japanese historical documents and sutras : an alternative to direct leaf casting WORKS OF ART ON PAPER（BOOKS, DOCUMENTS AND PHOTOGRAPHS）TECHIQUES AND CONSERVATION IIC Baltimore Congress 2002）、「太巻きの歴史とその重要性」（月刊文化財　5月号、第一法規、2004年）

フィリップ・メレディス（Philip Ian Meredith）
ヘッド・コンサヴァター　オランダ国立民族学博物館（ライデン）極東美術修復センター
1951年英国生。73年Brighton College of Art（Foundation Course and Diploma Course in Art and Design）卒業。81〜92年（株）宇佐美松鶴堂にて装潢に携わり、92年から現職。その間、オランダ、ドイツ、フランスをはじめとするヨーロッパ諸国、米国などの博物館、美術館の仕事に関わるとともに、国際会議などにおいても活躍している。
1990年（財）ポーラ伝統文化振興財団十周年記念特別ポーラ国際賞受賞。
著書に、‘Gerestaureerde rolschilderingen uit China en Japan’（Conservation of scroll paintings from China and Japan）Philip Meredith and Jan van Campen　Aziatische Kunst, Year 31, no.3, September 2001、‘Restaurierung von fernostlichen Objekten und einige Aspekte die der Bestanderhaltung von fernostlichen Objekten in europaischen Sammlungen dienen’（Far Eastern Conservation and some Aspects of Preventive Conservation in Europe）German translation and revision of paper presented at 8th International IADA Conference IADA Yearbook Vol. 1, 2000−Suppl.など。

仲　隆裕（なか　たかひろ）
京都造形芸術大学芸術学部環境デザイン学科教授・日本庭園研究センター主任研究員。農学博士。
1987年千葉大学大学院園芸学研究科修士課程修了（環境緑地学専攻）。京都市文化財保護課文化財保護技師（記念物担当）、千葉大学助手、山中庭園研究所、京都芸術短期大学助教授などを経て、2004年より現職。文化財庭園保存技術者協議会事務局長補佐、日本庭園学会理事。
専門は日本庭園史、史跡整備。「遺跡庭園学」を標榜し、立地条件・材料・施工技術・意匠などを実証的に解明すること、この知見に立っての文化財庭園修復に取り組む。
主な修復事例として「京都市指定名勝養源院書院庭園整備」（京都市東山区、1994）、「京都御苑近衛池修復工事実施設計」（京都市上京区、1996）、「シェーンブルン宮殿石庭修復」（ウィーン、1998）、「名勝平等院庭園州浜整備設計施工指導」（宇治市、1998〜2003）など。主な著書に、『京都の庭園 ― 遺跡にみる平安時代の庭園』（京都市文化財ブックス第5集、1991）、『庭園史をあるく ― 日本・ヨーロッパ編』（分担、昭和堂、1998）。論文に、「文化財庭園の修復技術」（『庭園学講座 X』所収、日本庭園研究センター、2003）などがある。

森田　稔（もりた　みのる）
京都国立博物館学芸課長
1978年広島大学文学部史学科考古学専攻卒業、80年名古屋大学大学院文学研究科考古学専門博士課程（前期）修了。神戸市教育委員会文化財課学芸員、神戸市立博物館学芸員、文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官・文化財管理指導官を経て、2004年から現職。
専門は考古学、特に窯業史、金工史。文化財学。
著書に、『考古資料集成　第6巻　弥生・古墳時代　青銅・ガラス製品』（共編著、小学館、2003）、「縄文・弥生・古墳」（『アジア陶芸史』昭和堂、2001）、「つたえる ― 災害を越えて ― 阪神・淡路大震災と文化財 ―」（『よみがえる文化財　芸術と科学の接点』文化財保存修復学会編、クバプロ、1995）

村上　隆（むらかみ　りゅう）
（独）文化財研究所奈良文化財研究所主任研究官。学術博士。
1978年京都大学工学部卒業、80年同大学大学院工学研究科修士課程修了、（株）住友特殊金属技術開発部を経て、85年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程、88年同博士課程修了。日本学術振興会特別研究員、奈良国立文化財研究所入所、現在に至る。文化財保存修復学会運営委員、日本文化財科学会評議員、京都造形芸術大学非常勤講師。
専門は歴史材料科学。文化財保存科学の視点から、金工を中心に材料科学の手法を用いて材料と製作技法の歴史的変遷を追求している。また、文化財の環境や防災にも関心を寄せている。
著書に、『金工技術』（「日本の美術　443号」至文堂　2003）、『色彩から歴史を読む』（共編、ダイヤモンド社）、『博物館の環境管理』（共訳、雄山閣）、『文化財は守れるのか』（文化財保存修復学会編）、『Japanese Traditional Alloys』（Butterworth）など。

神庭　信幸（かんば　のぶゆき）
東京国立博物館文化財部保存修復課課長。学術博士。
1979年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授を経て、98年より現職。
専門は保存科学。特に文化財の保存環境と修復技術ならびに初期油彩画に関する制作技術に関心をもつ。
著書に、『科学の目で見る文化財』（アグネ技術出版センター、1993）、『高橋由一絵画の研究―明治前期油画基礎資料集成―』（歌田真介編　中央公論美術出版、1994）、『文化財の輸送、展示、収蔵のための小空間における湿度・水分の変化に関する保存科学的研究』（学位論文、1997）、『京都大学所蔵「マリア十五玄義図」の調査』（国立歴史民俗博物館研究報告76集、1997）、『FT-IRスペクトル法による法隆寺古材の劣化の解析』（木材学会誌、1997）、『色彩から歴史を読む』（ダイヤモンド社、1999）、「文化財の梱包と輸送」（『輸送工業包装の技術』フジテクノシステム、2002）など。

内田　俊秀（うちだ　としひで）
京都造形芸術大学教授
1971年明治大学文学部史学地理学考古学専攻卒業、77年文化財保存修復国際センター科学理論課程修了、79年国立ローマ中央修復研究所修了。（財）元興寺文化財研究所保存科学研究室研究員、京都芸術短期大学助教授、京都造形芸術大学助教授を経て、87年より現職。2003、04年内閣府「災害から文化遺産と地域をまもる検討委員会」委員。
共著に、『現代美術館学』（昭和堂、1998）、『鋳物の技術史』（社団法人日本鋳造工学会、1997）、『古代青銅の流通と鋳造』（鶴山堂、1999）など。

文化財保存修復学会の沿革

文化財保存修復学会（旧・古文化財科学研究会）の活動は、昭和8年に滝精一博士の提唱によって発足した「古美術保存協議会」に始まります。戦後にいたって、「古文化財之科学」（柴田雄次編集）を創刊し、昭和50年には会の名称を「古文化財科学研究会」と改め、文化財に関する幅広い研究活動を続けてきました。しかも近年、文化財の科学的研究が盛んになるにしたがい、この分野における草分けともいうべき本会に課せられた責任は、ますます重みを加えつつあります。そうした要求に対応するため、本会は平成7年に「文化財保存修復学会」として新たなスタートを切りました。

本会の特長として、物理、化学、生物など自然科学諸分野の専門研究者はもちろん、考古学・建築史学・美術史学など人文科学部門の研究者、文化財保存関係機関の専門家・技術者・博物館や美術館の学芸員、その他文化財の科学的研究に関心をもつ多くの分野の方に参加いただいています。

（「入会のしおり」より）

◆文化財保存修復学会の連絡先

〒154-8533　東京都世田谷区太子堂1-7
昭和女子大学　光葉博物館内
Tel：03-5432-0620　Fax：03-5432-0622
E-mail：jsccp@sepia.ocn.ne.jp
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsccp/

文化財保存修復学会公開シンポジウム実行委員会

委員長●三輪嘉六
副委員長●村上　隆
委　　員●石川登志雄　内田俊秀　神庭信幸
西浦忠輝　松田泰典　村田忠繁
森田　稔
補佐委員●宇田川滋正

文化財の保存と修復シリーズ刊行のお知らせ

文化財の保存と修復⑥　科学で探る先達の知恵

文化財保存修復学会編／B5変形版／108頁
ISBN 4-87805-043-8　C1070／本体価格1,400円（税抜）
平成16年6月10日第1版発行
※本書は平成15年10月に開催されたシンポジウム「文化財の保存と修復－科学で探る先達の知恵」の講演収録集です。

基調講演　壬申検査と指定制度　文化財保護への先達の知恵
独立行政法人国立博物館　三輪 嘉六

隠された技法の秘密　源氏物語絵巻を探る
東京文化財研究所　三浦 定俊

出土赤色顔料の謎　「赤」に込められた古代人の願い
独立行政法人国立博物館　本田 光子

江戸時代に華ひらいた色金の世界　世界に誇る日本の金工
奈良文化財研究所　村上 隆

貫工法を中心として　不可能を可能にした古代建築技術
東北芸術工科大学　宮本 長二郎

漆芸の秘法を解き明かす　5000年の人類の知恵
東京文化財研究所　加藤 寛

うけつがれてきた日本人の知恵　「木の文化」は「保存の文化」
東京国立博物館　神庭 信幸

質疑応答・討議

文化財の保存と修復⑤　世界に活かす日本の技術

文化財保存修復学会編／B5変形版／120頁
ISBN 4-87805-025-X　C1070／本体価格1,400円（税抜）
平成15年5月30日第1版発行
※本書は平成14年10月に開催されたシンポジウム「文化財の保存と修復－世界に活かす日本の技術」の講演収録集です。

基調講演　日本の技術がどう活かされているか
独立行政法人国立博物館　三輪 嘉六

特別講演　日本に期待されるもの　世界の文化遺産の保護
早稲田大学 吉村 作治

和紙と刷毛による貢献　世界に広がる装潢技術による修復技法
昭和女子大学　増田 勝彦

インドネシアの木造建造物保護をめぐって
日本の建造物保存技術を活かす
文化庁　大和 智

なぜ日本が石造建造物の修復か　アンコール遺跡の保存修復
早稲田大学　中川 武

シルクロードに眠る都をよみがえらせる　交河故城の保存修復
（株）文化財保存計画協会　矢野 和之

地域に根づく技術の開発と応用　ガンダーラ仏教寺院遺跡の保存
東京文化財研究所　西浦 忠輝

うつぶせの石像を起こす　イースター島モアイ像の保存修復
奈良文化財研究所　沢田 正昭

パネルディスカッション

＜問い合わせ先＞
（株）クバプロ内「文化財の保存と修復Ⅱ」事務局
〒102-0072　千代田区飯田橋3-11-15　UEDAビル6F
e-mail：bunkazai@kuba.co.jp　http://www.kuba.co.jp/bunkazai
TEL 03-3238-1689　FAX 03-3238-1837